

## ■研究調査レビュー

## 農村集落における子育ての協同－和泊町国頭の事例－

神田 嘉延（鹿児島大学教育学部）

## ＜国頭の地域の自立発展の特徴＞

和泊町は全国的にトップクラスの2.58という高い出生率をもつ自治体である。日本の全国平均の出生率は1.36（2000年の厚生省人口統計）である。和泊町に存在する地域の相互扶助的な生活構造や子どもをめぐる地域活動などが、安心して子育てできる構造になっている。本稿では、村づくり日本一になった和泊町国頭を事例にしながら農村集落における子育ての協同を地域構造との関係から明らかにする。

国頭字は、1992年に豊かな村づくり日本一としての天皇杯をもらった地域である。国頭地域は、土地条件も悪く、隆起珊瑚礁がいたるところにあり、農業の不向きな地域で、移住、過酷な年奉公、出稼ぎを強いられた歴史をもっている。農業に適さない貧しい集落であったので、隆起珊瑚礁という条件で、過酷な労働を強いられる海水を岩に干しての塩づくりをした。そして、島内くまなく歩いて、塩と米を交換して、生活してきたところである。

本土復帰の昭和28年頃までは、沖永良部の島のなかでの最も貧困な地域であった。この最も貧しかった国頭字が、1992年に村づくり日本一として表彰され、農業粗生産額が平均して、8431万円となり、沖永良部でも最も高い農業所得をあげる地域として成長してきたのである。

それは、石川里芋栽培と経営の研究、切花栽培と経営の研究、サトウキビとの輪作体系の工夫による自然力による土壌クリーニング、効率化、農産物市場などをよく研究しての農

業発展に国頭字地域をあげてとりくんできたからである。

国頭は、自主的努力と創意工夫による課題解決をすすめ、多くの優れた農業リーダー群が存在している地域になったのである。ここには、自立・自興という人間の諸能力の発達が地域に培われてきたのであり、この地域の特性のなかで、保育所・幼稚園・小学校の機能を充分生かしてのユニークな地域ぐるみの子育てが行われている。安心して子育てができるということは、第一に地域での子育ての協同があること、第二に、子育てを支えていく保育所・幼稚園・小学校などの公的な子育て・教育機関が、地域住民の参加のもとに機能していることである。また、第三に、地域での文化的な生活ができる経済的所得が得られたこと。第四に、地域に豊かな文化性と優れた教育条件が存在しているという親たちの認識が重要なことである。

## ＜国頭の子どもの人口と地域の概況＞

年齢別人口は、小学校入学以前の子どもが63名、小学生79名、中学生46名、高校生48名と小学校入学以前の子どもと小学生、中学生・高校生の児童・生徒を合計した数が236名である。かれらの人口の比率は、20%を越えている。地域のなかで一定の比率を占めている。集落の担い手人口を18歳（高校在学含まない）以上の青年から69歳までとしているが、679人と、全字人口の57.9%である。

70歳以上の高齢者の人口は、21.3%となっている。高齢者と18歳以下の人口比率が同じ程度である。人口構成からみるならば、農

家戸数が減少しているが、字地域全体としての、多くの農村地域にみられる逆ピラミッド現象はみられていない。若い層の人口の一定の比率になっている。

2001年度の国頭字総会に提出された字の活力度調査によると、総戸数414戸、総人口1172人、農家戸数215戸、農家人口809人、字一戸あたり耕地面積192a。総戸数の増大で、最近、注目することは、国頭に住みたいということから、外から定年後家族連れで移住してくるのが現れていることである。

親子の世帯の居住形態が最も極端なものは、農業をする若い層である。住宅地は、役場近くの市街地に住んで、そこから国頭の農場に行く形態も生まれている。農業機械などは国頭の実家においている。生活様式の大きな変化の時代の中で、新しい形態の居住様式が、国頭の農家に生まれている。

2000年の農業センサスによれば、国頭の195戸の販売農家で世帯員の平均は、3.8人であるが、6人以上の世帯員がいる農家は、33戸を数えている。また、国頭の農家で3世代同居が37世帯である。

和泊町では、21地区の字からなっているが、国頭字は、市街地を形成する和泊を除くと最も多くの戸数をかかえる農村地域である。農家戸数は、全体の戸数404戸のうち、215戸である。

専業農家113戸、第1種兼業農家60戸と生計を農業を中心とする農家が多い。国頭の総人口1160人のうち、農家人口は、809人であり、農家として暮らす人々が7割を占めている。国頭字での農家の位置が圧倒的に大きいのである。そして、農業を中心とする生計をたてている人々が多い。

販売別農家数は、200万未満72戸、200万から500万未満45戸、500万から1000万未満29戸、1000万から2000万未満36戸、2000万以上13戸である。

### ＜国頭の地域子育て支援体制＞

国頭の子育てをみていくうえで、地域として子育ての支援が保育所・幼稚園、小学校という公的な機関と同時に、地域のなかに、子育ての支援体制が血縁・地縁関係のなかに強く存在していることが特徴である。子どもの世話は親が担うことはいうまでもないが、農繁期や親が特別に用事がある場合には、地域の人をお願いしてもらうことをしている農家が多い。

国頭の保育所には、他の地域からも子どもをあずかっている。和泊町のそれぞれの地域には、保育所が整備されている。3歳まで保育所で4歳になると幼稚園ということで年齢的に保育所と幼稚園は区分されている。

保育所に入っている3歳以下の子どもは、25名で学校にあがるまえの子どもは55名が国頭の保育所・幼稚園にあずけている。小学校と幼稚園、保育所が隣接した施設であるので、子ども達は同じ施設の感覚で自由に一緒に遊べるようになっている。地域では保育園に対する信頼もあつい。保育士からみると母親に、勉強家が多いということである。

幼稚園になると休み時間に小学校1年生・2年生・3年生などと一緒に遊んでいる。国頭の子どもは友達同士で徒歩で一緒に帰り、そして、また、自宅に帰って一緒に遊ぶのが一般的である。

幼稚園では、リズム遊び、ものづくり遊びなどをして教育的に考えている。国頭では祖父母と同居している家庭が少ないが、祖父母が近くに住んでいるのが一般である。子ども達も祖父母のところに気軽に遊びに行くようになっている。高校生は夏休みに福祉ボランティア活動として保育園の手伝いをしながら子ども達と接触している。

国頭では小学校低学年の学童保育の要望がない。子どもをよく知っている大人達が見える範囲で子どもが遊んでいるので、特別に学

童保育ということをしなくてもいいということである。

国頭の親たちは地域ぐるみで会をつくり、国頭の伝統の労働や苦勞の歴史を子ども達に教えていくようにしている。地域では塩干しの教育やサトウキビの昔しぼっていた作業を教えている。保育所・幼稚園・小学校では、積極的に地域で共に子育てをしようという活動を地域の役員や高齢者としてしっかりと力をあわせて実施している。

保育所・幼稚園の職員が地元の集落から採用している比率の高さも地域の子育て支援体制の地元協力に大きな役割を果たしている。子どもは地域の宝であるということが地域住民のなかにしっかりと定着している。

専業農家の女性グループでスマイルの会などの育児と農作業の学習や研究活動をしている活動も注目するところである。子育てや家事など夫婦のパートナーシップの研修を積極的に展開していることも見落せない。

和泊町では保育サポート養成講座を開き、保育士の専門性とともボランティアとして地域のなかで子育てをサポートする体制づくりを展開しているが、国頭でも、この講習に子育ての経験者が積極的に参加している。

### <国頭住民の地域活動と相互扶助性>

国頭の地域活動は集落全体としてとりくんでいるのが特徴である。集落の役員を中心に地域のなかにそれぞれにくまなく組をつくり、414戸を15の組に分けている。元気な女性グループを中心に父親と共に子どもと一緒に地域活動をしている。国頭では高齢者のグループ活動も活発で、生き甲斐対策として、子どもとの交流活動を積極的に行っている。子どもとお年寄りが互いに学びあうことをしているのも特徴である。

字研修館において、国頭字教育懇談会6月、7月に実施。国頭では、1977年に教育振興

会をつくり、PTAと校区住民の密接な連携のもとに、地域の子どもの教育にあたることとして、その会は生まれている。

役員の構成は、教育委員、教頭、PTA役員、保育園・幼稚園代表という教育関係者ばかりでなく、農業委員、農協理事、民生委員、老人クラブ会長、役場職員代表、壮年団、青年団、婦人会、国頭駐在警察官から構成されている。

国頭小学校では、地域住民の協力のもとに郷土教育として、潮干し学習をPTAの協力のもとに、1982年度から全校児童参加のもとに実施している。学校の庭園には「汐干す母の像を」をつくって国頭小学校の教育目標の象徴にしている。

郷土の昔の人が潮をくみ、潮を干した現場を見学したり、潮干しを体験することにより、祖先の人々の苦勞が分かり、勤勞に感謝できる子育てができるという教育目標をもっている。急坂の危険な海岸から潮をくみ、岩に潮をたたきつけながら潮水をためていく、そして潮水を干す作業をつづけながら、こくなった潮水を自宅に運び、潮を焚いて塩にしていくなという過程を学んでいく。

この学習は、国頭小学校の裁量で20年以上も続いている。それは、地域住民参加による独自のカリキュラムである。さらに、黒砂糖づくり学習もPTAの協力のもとに、同様な形態で1983年から実施している。

また、農業体験学習は、農家と改良普及員の協力のもとに実施している。郷土の伝統芸能継承活動として、国頭ヤッコ、仲里節を芸能保存会とPTAの協力のもとに実施している。郷土教育をとおして、地域住民の小学校教育の協力活動がみられるのである。伝統的な文化を子どもに地域としてきちんと継承していくような地域活動を展開しているのである。

ところで、国頭字の中学生や高校生の生徒達に、バンドの練習場として、地域の自治公

民館の一部を開放しているが、生徒達は、敬老会、ガジュマル音楽祭、新春芸能発表会などの地区の行事に字の住民の一員として協力している。生徒達も自主的なむらづくりの参加の意識をもって活動しているのである。

農村振興運動に国頭では、1977年にむらづくり委員会が組織されていた。1971年に167平方メートルの国頭自治公民館の新築が行われたが、1982年に「農村集落多目的共同利用施設」の名称で、341平方メートルの広さをもつ、研修館ができたのである。現在は2つの集会施設で、字の常会、敬老会、各種研修会、踊りの練習、老人クラブの交流会など各種の行事が行われている。

1979年度から国頭の村づくり活動として、地域の人々の健康と融和をめざして、国頭住民の地域づくりのための運動会がはじまったのである。そして、1984年からは、国頭地区の15組ある対抗バレーボール大会がはじまっていく。この運動会とバレーボール大会は、国頭地域の多くの人が小学校に集まるのである。

国頭字では、生活のなかに花を取り入れるフラワーアレンジメント教室をするなど、花卉生産地ということから、地域の住民が個々の家庭において、生活のなかに花のある暮らしを積極的に取り入れている。また、釣り、民謡、舞踏、三味線などを楽しむ各種の同好会も地域のなかで生まれ、農閑期には、国内や国外の旅行を楽しむ人も増え、文化的な潤いをもったゆとりのある暮らしをしている。

さらに、伝統舞踏を若い人に継承する国頭芸能保存会が組織されている。1968年に設立され、町の文化協会には、1976年に加入している。2000年に会員27名。国頭伝承舞踏保存会が2000年に創立され、会員は25名である。

島歌を継承するために、国頭民謡友好会が1985年に設立され、1987年に町の文化協会に加入している。2000年の会員は16名。琉

球舞踏を伝承するグループとして、1988年につくられた若葉会、めばえ会がある。

和泊町では中央公民館と同時に字単位の教室も実施している。2000年度の和泊町の公民館講座は、46講座ひらかれているが、そのうち中央公民館で実施するのが21講座である。国頭の字の研修館（字自治公民館）では6講座を実施している。その内容は習字教室、ゲートボールをしながらのふれあい教室、野山や庭先に花を生ける教室、日本舞踏教室、バトミントンの基本の教室、琴の基本から合奏の教室（2教室）とが行われている。

以上のように様々な文化的なサークルや学習サークルが集落のなかにつくられ、それぞれの趣味を仲間と共に集落のなかで楽しんでいる。集落のなかにある文化的なサークルや学習グループは、地域での文化的な連帯意識の形成に大きな役割を果たしている。集落の行事や和泊町での行事などで日頃の成果を披露して、自分たちの文化的なたのしみを集落の連帯のなかでたかめているのである。

スポーツ少年団は、国頭サッカー33名の団員、指導者数5名。国頭バレー女子団員13名、指導者3名。子どもからお年寄りまで字の人々が、みんなで踊る「国頭ヤッコ踊り」は、各種イベントや老人ホームの慰問活動に欠かすことはできない。これは国頭の字住民であれば、誰でも踊れるものである。夏休みの朝のラジオ体操後、子ども達は地域の大人から手ほどきを受けるのである。このように。地域の伝統的な文化であるヤッコ踊りを子どもに対して徹底して教えているのである。ヤッコ踊りは集落住民の共通の文化的なアイデンティティである。

国頭集落では様々な地域活動にそれぞれの年代の子どもを参加させている。そこでは、子どもの自発性を年齢段階にあわせて実施している。地域活動をとおして、子どもが育っていく姿を地域の人々が支え合っていく体制をつくりあげているのである。

### <まとめ>

安心して子育てができるということは、集落の子育ての協同が定着していることである。この集落の子育ての協同の構造は、子育てということばかりではなく、地域での文化的な連帯や経済における協同性の問題が根底にある。

国頭集落の協同性は、多様な趣味や文化を尊重しての集落としてのアイデンティティがつくられていることが特徴であった。歴史的に貧困地域であったことが教育に力を入れて、地域的に自立していこうという精神が形成されてきたのであり、その精神を継続していこうということで、塩干しの母の像をたてて、その苦労を実際の体験によって、集落の子育てに積極的に活用していることである。

この集落の子育てに公的な教育機関が中心的な役割を果たし、また、保育所や幼稚園なども集落のなかに整備されていることは安心して子育てができるということで大きな条件になっている。安心して子育てができる条件として、経済的に文化的水準を維持できる所得が保障されているということを見落としてはならない。